

## 医心 伝心

# 認知症になったらそっと 逝かせてね

県医師会副会長 小関 支郎

妻との会話でかつては、一応わかったよ、と言っていた。私自身もしばらく前までそのように思っていたことがある。認知症が進んでいくと他人に迷惑をかける、不幸、攻撃性、物盗られ妄想が生じ、何年間も寝たきりになり、だんだんやせ細り、笑わなくなり、意思の疎通が図れなくなるしかなないと考えていたからだと思う。

今日ではそれは誤りであることがわかっている。認知記憶症候群の人たちがその介護のために特別に教育を受けた介護者が勤務する施設で生活すると、体重が減少することも笑う能力を失うこともなく、死亡する10日前までは寝たきりにならない。興奮や攻撃性の行動に関してもほとんどみられず、平静を保っているそうだから。(三度 Humanitude)

ところで、こうした介護関係が築けないとき、介護する側にも虚脱、うつ、動機づけの消失など介護の仕事の継続困難の問題が生じる。介護離職の要因としてひょっとしたら見逃せないものではないか、と感じている。

しかし、介護者がことばや、まなざしや、しぐさで意思の疎通を図り交流しようとするのを見れば必ず、病気の人たちも同じように意思の交流を図り交流を求めてくるそうだ。介護者が病気の人たちに対して、その環境に働きかけ、それを変える可能性を提供すれば必ず、病気の人たちも環境に働きかけるのがみられる。病気の人たちが介護のときに幸福や喜びを感じていれば必ず、介護者

も介護をすることに、喜びを感じていることがわかった。病気の人たちがその生活環境を好意的に評価しているときには必ず、介護者もその労働環境を好意的に評価していることがわかったそうだ。

力を発揮する介護とは、残された機能を有効に使えるよう援助し、必要な情報をつたえ、環境を病人に合わせ、幸福感や喜びを味わうことができるよう配慮するものであり、衰えが不満や怒り、自身や他人への拒絶につながるようなことがないようにできる介護である。

介護や看護、医療の提供が「攻撃されている」と受けとられることがある。「攻撃されている」ときにとる認知能力の衰えた人たちの反応は、屈服や戦いというかたちであらわされざるをえない。屈服は絶望や事なかれ主義症候群のかたちをとり、一時扱いやすさを感じても深い陰性症状に悩まされる。攻撃性や興奮は周囲の人を煩わせる。今では病的興奮行動と呼ばれている行動の発生、消失、悪化、軽減などは大部分が環境と介護に大きく左右されることがわかっている。力を発揮する介護が提供できる施設では、病的行動の75~95%が消失したということである。人を介護するということは、その人を怒りから解放するとともに諦めから解放することでもある。

私が認知症になっても、大切なひとですと伝えられる介護技術の普及が急務である。